



「笹川杯作文コンクール2012」～中国語で応募～ 第2回（7月分）優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

※個人名の掲載については、承諾を得ています。

覆った巢の下に無事な卵があるはずはない

河南省 徐愛民

2011年3月、日本の大地震と大津波により福島原子力発電所に放射能漏出事故が起きた。死傷者や深刻な財産的損失があっただけでなく、放射能漏出の影響は世界の多くの地域にも波及した。そのため、原子力発電の安全問題も再び広く関心を集め、多くの有識者は、原子力発電の安全を人類の生存と発展に関わるレベルにまで引き上げた。

中国の古語に「城門での失火は、災いが池の魚にも及ぶ」と言うものがあるが、原子力発電の安全はその最もよい解釈となってしまった。1950年代に世界のいくつかの国々が競って原子力発電を開発して以来、原発事故は原子力発電の発展と影のように足並みを揃えて来ており、「小さい事故は絶え間なく、大きい事故も起きている」と言えるのだ。その中で最も深刻だったのが、1986年の4月26日ソ連（当時）で発生したチェルノブイリ原子力発電所の事故で、事故で発生した大量の放射性物質を含む埃が、北欧と東欧、西欧の一部国家まで汚染した。専門家の分析によると、この事故による放射能漏れの後遺症を完全に取り除くには、800年もの長い時間が必要だということである。

ああ！一世代の貪欲さが、数十世代に危害を残したのだ。原子力発電の安全を重視しなかった人々には後継者がいなかったのだろうか？

今日、CO₂の排出量が増大して地球は温暖化し、生態系の危機が顕著となり、多くの人々が人類共通の郷里を保護するために奔走し、声を上げている。しかし、人類が進んでリスクのある道を選んでいる理由が何であるのかを冷静に考える人は少ない。それは、人類がひたすら発展、繁栄、安逸を求めるという醜悪な本性を持っているからである。第一次産業革命では、蒸気機関の使用が普及し、人類が持つ物質と財産を質から量まで何もかも飛躍的に向上させた。第二次産業革命では、電力が広範に使用され、電力工業と電器製造業が急速に発展し、人類は電気の時代に入った。原子力、コンピュータ、宇宙技術とバイオロジカルエンジニアリングの発明と応用により、人類は第三次産業革命を迎えた。これらの産業革命の成果は、いずれも人類の生産力のレベルを大いに引き上げ、生活様式にも大変革をもたらした。しかし、こうした大きな発展が安定的で信頼できるものであると、一体どれだけの人が考えただろうか。

この問題に答えるため、やはり中国古代の著名な思想家である老子にお出まじいだこう。老子には「企（つまだ）つ者は立たず、跨（また）ぐ者は行かず」という言葉がある。つま先立ちは長続きせず、大股では遠くまで歩けないという意味である。今日、人類の歩んできた発展の道を振り返ると、あれ程「一刻を争」ってきた反面、どのように落ち着いて歩くのかについては、余り考えてこなかったのである。

福島原子力発電所の事故が発生したことにより、経済発展の速度の面でまた警鐘が鳴らされた。福島原子力発電は、日本国内のエネルギー不足を緩和し、日本の経済発展を促進し、日本の暮らしを改善するなど多くの面でプラスの影響をもたらしていた。しかし、原子力発電所の一時的な安全は、決して恒久的な安全ではない。普段の安全は、自然災害を受けた後にもなお安全であることと等しくはない。一旦事故が発生したら、福島の人々だけでなく、日本国民ひいては世界各地の人々にも災いし、最終的には子々孫々まで災いを残してしまうのだ。

私達はこの灯火の輝く年代を生きていることを喜んでいる時、私たちは、ろうそくを頼りにそぞろ歩く楽しみを失っている。エアコンの効いた室内で心地良い温度を楽しんでいる時、私たちは、囲炉裏を囲んで酒を飲むことや、うちわの風の雅さを失っている。自然を征服した成果に陶醉している時、自然界の報復が予期せず私たちにもたらされるのである。勿論、石器時代に戻って焼き畑農業をするという訳ではなく、経済発展の中で規則を尊重し、安全を重視することで、害を避けて利益に向かい、全人類ひいては後の世代に幸福をもたらすのである。

福島原子力発電所の事故が発生してから、世界で多くの国々が原子力発電の発展の歩調を緩め、原子力発電の安全管理に対して監視を強化している。しかし、覆った巣の下に無事な卵があるはずはない。原子力発電所はひとたび事故が発生したら、被害に遭うのは一地域の一時期だけではなく、人類全体であり、今後のかなり長い期間なのである。だから、私たちは原子力発電の安全管理を監督する国との協力を強化し、国際原子力機関などの世界的組織に力を発揮させ、原子力発電という全人類の頭上にある危険なダモクレスの剣が落ちてこないことを確実にしなければならない。